

Title	原宗子著 『古代中国の開発と環境 『管子』地員篇研究』
Sub Title	
Author	鶴間, 和幸(Tsuruma, Kazuyuki)
Publisher	三田史学会
Publication year	1995
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.65, No.1/2 (1995. 10) ,p.147- 154
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19951000-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評…原宗子著『古代中国の開発と環境』『管子』地員篇研究

(研文出版、一九九四年九月、四四三頁)

鶴 間 和 幸

久しぶりに中国古代史の刺激的な研究書に出会った。

本書は著者が一九七五年、『史学雑誌』八五編十一号に「いわゆる『代田法』の記載をめぐる諸解釈について」という論文を発表して以来、一貫して中国古代の農法研究を続けてきた成果を単著にまとめたものである。

代田法とは、従来の「ばらまき種蒔き法」に対して「畝たて種蒔き法」というべきものであり、毎年畝の場所を代えていく前漢武帝のときの新しい農法であるが、氏は代田法の前提とされていた灌漑の効果を否定して論議を起こした。つまり黄土の乾燥した、塩分を含むアルカリ土壌では、十分な排水措置を施さないかぎり、渠(灌漑水路)による大規模な灌漑はかえって塩分を地表

に噴出させる塩害をまねくので、代田法とはこうした灌漑事業が破綻したあとに講じられた新しい農法であると主張した。中国古代帝国形成の条件として国家による大規模灌漑を想定していた評者にとっても、当時驚きをもって読んだ記憶がある。

その氏がその後の二十年の研究成果をまとめた本書には「開発と環境」という今日的な題目が掲げられているが、目指すところはやはり中国古代の専制権力の基盤を大規模な治水灌漑事業に求める学説への疑念であり、『管子』という書を実証的に解釈することによって、そこには人の手による除草作業と井戸水小規模灌漑を前提とする農法があり、それが東アジア的農法の源流であったと主張している。

評者も中国古代の水利に関心をもっており、そのとき

にいつも原氏の元来の主張が対局にあった。中国古代社会や国家を支えていたのは大規模な治水灌漑という公共性であったのか、それとも自然の天水に頼り、地表の耕土をすみやかに攪乱させて土中の水分の蒸発を防ぐ規模で集約的な農業であったのか。かつて木村正雄氏は「国家は治水水利機構を支配することによって農地を支配し、農地を支配することによってそれを生産手段とする一切の農民を支配した」(『中国古代専制主義の基礎条件』『歴史学研究』二二一九、一九五九年のち『中国古代農民叛乱の研究』東京大学出版会、一九七九年)といい、これに対して、著者が師と仰ぐ天野元之助氏は、華北においてアワ、キビ、ムギなど乾燥に耐える作物の生産は天水農業、旱田農業で十分可能であったと反論された(『中国古代デスポティズムの諸条件——大会所感——』『歴史学研究』二二三三、一九五八年)。すでに三十五年以上経過した現在、この木村、天野論争はどのように受けとめたらよいのであろうか。

評者が中国古代帝国の形成の条件として大規模な渠水灌漑を想定するとき、いつも出発点となっているのが、秦帝国の形成の経済的前提として鄭国渠を位置づけた司馬遷のつぎの記述である。『史記』河渠書によれば、隣

りの韓の国から秦の国力を疲弊させるために間諜として派遣された水利技術者の鄭国が、渭水盆地に流れる涇水の水を引いて、渭北平原四万頃の土地を灌漑し、地表の塩分をも除去したことに成功したとし、最後はつぎのこゝとばで締めくくる。「是に於て関中沃野と為り、凶年無く、秦以て富彊ふきやうにして卒に諸侯を并あわす」。評者自身、この司馬遷の一つの結論を前提に秦帝国形成史の研究を出発させたが、つまり秦帝国による統一の条件に鄭国渠の灌漑事業の成功があったと見てきたが、近年ではより深く二つの方向から読み直さなければならぬと考えはじめている。すなわち一つはこの文章を前漢代の司馬遷の評価、見解としてまずとらえるべき点であり、もう一つは秦に征服された東方諸国の立場からも統一の意味を考えるべきという点である。本書への評者の期待はまさに後者にあり、統一帝国形成の過程で失われた齊の側の論理をどのように蘇らせてくれるのだろうか。

二

管仲、名は夷吾という人物(？—前六四五)は春秋五

覇のうち第一の覇者となつた春秋齊の桓公（前六八五—六四三）に仕えた名丞相であり、齊国の富国に努め、齊では後世まで最も信頼された官僚であつた。司馬遷が『史記』にもう一人の齊の丞相晏子と一緒に管晏列伝を記述していることからわかるように、管仲は漢代にも理想的な賢臣と評価された。その管仲の名を冠してかれに託した『管子』という書物は、全八十六篇、現行七十五篇、管仲以後の戦国時代の富国強兵を目指した政治、経済論の集大成である。

『管子』の主張は、ようするに民衆が物質的に豊かな社会を作れば、礼節も道徳も守られ、安定した国家が生まみ出されるというものである。「倉廩実（そうりんみ）つれば、礼節を知り、衣食足れば、榮辱を知る」ということばは、よく知られている。桓公を覇者に導いた齊の国の物質的繁榮を、とくに古代の人々の自然への関わりから解きあかしてくる。管仲は、覇者ではなく徳治による王者を理想とした孔子から見れば二流の人物と評されたが、管仲によれば衣食足りてこそその徳治である。

管仲の提言は山海の産物の商品流通の穀物貯蔵と価格の調整にはじまり、治水管理に及ぶまで多岐にわたっているが、著者は『管子』のなかの地員篇の文章を徹底的

に分析し、そこに描かれた古代齊の地の自然環境の世界を蘇らせた。地員篇の文章は土壤の種類、地下水位、適性植物、土質、水質に関して述べたものであるので、自然環境を開発の立場から一つ一つ読みといていくうちに、古代中国の科学の水準の高さを自然のうちにわれわれに教えてくれる。氏は現代の近代的農学、土壌学といった非近代的部分を切り捨てる学問の方法を退け、古代の立場をできるだけ尊重して全体を整合的に読み取ろうとした。著作によれば文章が難解とされてきたのは、文学の異同解釈に終始してきたからであり、文章全体を見通せばすっきりと読めるという。第一章から第七章までの土壤、樹木、草、糧食、麻、中国全土（九州）の土壤、丘陵に関する地員篇の文章の解釈が本書の中心である。地員篇の文には土壤や植物名が数多く羅列され、きわめて難しいが、簡単に紹介してみよう。

第一章「土壤序列と五声配置」では、いきなり土壤と音楽というわれわれから見れば奇妙な取り合わせが登場する。古代山東地方の人々の実に豊かな知恵であり、科学であつたのだろう。五声とは低い法から宮、商、角、徵、羽と名付けられた中国独自の音階であるが、地員篇では通常とは異なる徵、羽を頭に宮、商、角と並ぶ音階

が見える。瀆田（灌漑農地）、赤壩、黄唐、斥埴、黒埴の五種の土壤はそれぞれ三十五尺、二十八尺、二十一尺、十四尺、七尺の地下水位の井戸の水を農業用水として耕作する農地を表しており、地員篇の五音の高い方から角、商、宮、羽、徴に象徴的に配当されていた。

第二章「樹木の選択に見る開発への視座」では、山に生えている樹木の種類が、地下水位の深さを推定するための指標となっているという地員篇の文章を読み説く。たとえば山の上に根が浅く湿潤に強い満櫛（ダフリアアラマツ）という樹木が生えていれば、二尺も掘れば泉に達するが、柳であれば三尺、楊（ヤマナラシ属）の場合は五尺という具合である。また切り立った山の中腹の格（コノテガシワ）の木、なだらかな山復の品楡（ニレ属）では、それぞれ十四尺、二十一尺と、より深い水位を表しているという。樹木の豊かな山東丘陵での農業の知恵を見る思いがする。

第三章「草の実態と意義」では、草を除去すべきという中華の伝統的意識に対して、『管子』では草地の経済性（薬草、牧草など多様な有用性）を重視しているという。

第四章「植えつけるもの——糧食」では、大重・細重

をオオムギ、大苗・細苗をコムギとし、小麦が山東の變化に富んだ山東の地勢・土壤ではいろいろな糧食栽培が行われていたという。すなわち腐食堆積に富み水分条件のよい平地ではムギ類、山間地ではヤマイモやハトムギ、ソバなど、そして地員篇では稲が最下級に位置づけられている。

第五章「麻をめぐる」では、古代の衣服の素材としての麻の生産地と生産形態をとりあげる。限られた土地でしか栽培できず、衣服を織る紡績は、家族内分業としての女性の仕事ではなく、特殊技能の女工集団によって行なわれたという。一般に中国古代の文献では「男が耕し、女が織る」という表現が見られるが、農民の妻は農耕労働のほかに機を織る余力はあろうはずもない。『商君書』では女子も男子同様農耕と戦争に従事すべきという秦の女性観が反映しているが、『孟子』の「男耕女織」は農民ではなく、もともと紡績の技能をもっていた士の妻たちが家族の衣料を作るという士階層の生活を反映していたという。女性研究者の眼からの鋭い指摘である。

第六章「九州の土の実態」では、黄土がもつとも肥沃であるという『尚書』禹貢からアンダーソンの『黄土地帯』に至る通念を退け、地員篇で「九州の土」という土

壤が古代中国の全域であるにとらられてきた通説に疑念を發し、五粟という土壤を最高位に、以下五沃、五位から五桀（塩類アルカリ土壤）に至る十八種の土壤名を丹念に分析する。地員篇の土壤評価の基準は、華北の主食のアワ、キビに適する五志（二次堆積黄土）の土壤を中間位に、多様な産品をもたらす土壤を上位に位置づけるという独特のものであるという。もし秦のように軍事大国をめざし穀物生産を重視してアワ、キビ畑を拡大してしまえば、周辺の森林と草は育たず、土壤は乾燥化してしまう。自然環境と共存し、多種の商品作物を栽培、流通させて生きていた齊の人々にとつては、自然改造による一律的な穀物生産の方向はとらなかつた。

第七章「ヤマ」と丘陵地帯」では、墳延以下高陵土山までの十五の丘陵地形の記述は、山東丘陵の様々な地形における山麓などの地下水位を表していることを読み説く。

三

著者も十分承知のことであるが、本書の分析対象は『管子』全体からいえば地員篇という一編にすぎないの

で、『管子』全体八十六編の世界を画いているわけではない。たとえば『管子』度地篇によれば、堤防による治水論が国家的な工事として展開されており、国家は倉廩に穀物を満たすような努力をしなければならぬ。五害（水災・干ばつ・暴風雨・伝染病・害虫）のうちでもっとも深刻であるのは、とくに黄河下流域の齊では洪水の害であった。春の渇水期に堤防工事をし、堤防のわきに貯水池を造つたり、荊刺、柏楊などの樹木を堤防に植えて土質を固めたりする知恵が見える。齊の水利技術の水準は前漢になっても高く、長安への運河漕渠を建設した齊の水工（水利技術者）徐伯などの人物が知られている。もちろん戦国諸国が築いた堤防の範囲を越えた大規模な治水の堤防は前漢武帝期を待たなければならぬが、国家的な治水先進国は渭水流域の秦ではなく、黄河下流域の齊、趙、韓、魏の諸国であった。同じ『管子』のなかの地員篇の井戸水灌漑の小規模農法の世界とどう整合的に捉えるのか、本書を読むかぎりまだ疑問が残る。

著者が第四章でふれている麦と粟の關係は、非常に興味深い。中国古代の華北の主要穀物が粟であることは常識とされているが、齊では伝統的栽培の地に粟栽培が政治的に推進されていったとし、井戸水灌漑も粟作不適地に粟作を広げるための手段であったと推測されている。

『管子』地員篇に描かれた農業、自然は戦国斉の地、現在の山東省の地であった。そこに流れる思想は、自然と共生しながら開発していこうというものである。それがこの地が秦によって征服され、秦帝国に組み込まれたというという政治的現象のなかでどうなっていたかということは、実は統一的な中国世界の性格を知るうえで重要な問題を含んでいる。著者は斉の『管子』には本来自然と人為のバランスある開発の視点があり、また戦争ではなく平和を前提にした山沢の産物を流通させようという商品経済を重視していたが、兵糧の穀物生産を集中しようとする穀物優先主義をとった秦のやり方が全土の樹木を襲ったと見ている。しかしいくら政治的に秦に滅ばされたといっても、農業経済の面でも秦に屈服してしまつたといつても、少々短絡的に過ぎると思われる。

粟だけでなく麦を積極的に栽培していたことは、斉人の季節循環の感覚に独特のものを与えたように思われる。粟作中心の秦では、粟の実りを終えて一年が終わると考えたので、収穫を終えたあとの冬十月を一年の始まりと考えるようになったが、斉では冬蒔きと春蒔きの麦、黍、粟など多種の収穫が、春から始まり秋まで繰り返し行われる。自然の循環のなかで生きてきた斉の人々の生活と

心情がうかがえる。

自然環境との調和を重視する斉の思想と、自然環境を破壊していこうとする秦の思想の対立した図式をうかがひあがらせたことは、それはそれで中国古代の東西の地域差を反映するものである。しかし斉にも開発破壊がなかつたわけではない。孟子が「(秃山の)牛山もかつては美なり」といつた斉都臨淄城東南の牛山の樹木の伐採も、一つの環境破壊であろう。『管子』には海水を煮沸した塩業が盛んであり、消費量も多かつたことが見え、塩の専売制は沿海国の富国には欠かせなかつた(海王第七十二)。その生産には燃料として枯木が必要であり、それをまかなうには大量の樹木を伐採しなければならなかつた。富国と環境破壊は、程度の差はあつても、戦国諸国では地域を問わず表裏の関係であつたと思われる。管仲のことに「山を童はげにして沢を竭つくし、利を益し流を搏ひらくす」(国准第七十九)とあるのは、流通の物産の利を優先させた斉の地での環境破壊とはいえないのだろうか。

地員篇がきわめて土壌、水位、植樹などの技術論に終始しているのに対して、他の篇では政治論、経済政策論が展開されているので、本書で明らかにしてくれた難解

な技術論が生き生きと現実の問題として語られている。本書は地員篇の解釈という点では十分であるが、読者により平易に地員篇を理解させるためには、地員篇の技術論と他篇の政策論との関係をもっと紹介するなどの配慮もほしかった。たとえば軽重丁第八三には齊の地域の多様性を物語る故事が出てくる。齊の西では洪水のために民が飢え、穀物の価格が騰貴する事態であったのに（おそらく濟水、のちの黄河の洪水か）、齊の東（海岸寄り）では豊作で穀物が安かったという。地員篇に見られる土壤地理の多様性は、現実問題としてはこのように反映していたのであろう。

四

本書を読んで見ると、率直に言って、研究の焦点は異なっていたけれども、目指してきたところは評者も実に共鳴できることに驚かされた。

統一した権力機構を早い段階で作り上げていった中国古代という時代、結果として統一実現の担い手は、戦国七雄のなかでも西方辺境の黄土高原に位置した内陸国家秦であり、齊などの黄河流域、海辺の諸国は征服されてしまった。中国古代統一の源泉は西方の乾燥した黄土に

あり、東方の華北平原や紺碧の海に面した東方六国はその力のなかに呑込まれてしまったかのようなのである。著者の立場は、敗北した東方地域の側に立ち、西方の征服者の立場からの、しかも西欧的歴史発展の視点から見えてきた従来の中国古代史像に反省を迫ろうという壮大な史観がうかがえる。共鳴できるといったのは、評者自身も秦による統一帝国の形成史を追っていくうちに、秦が征服した東方六国の地を、東方世界として位置づけ、この世界からいま一度帝国形成史を捉え直すところのようになるかということを試みているからである。

かつて評者は始皇帝が統一後に行った東方巡行の経路を調査するために、山東の地を回ったことがある。始皇帝が回ったのは齊の八神（天地、日月、陰陽、四時、兵の各神）の地であり、本書を読みながら八神という齊の自然信仰の地を改めて思い浮かべて見ると、西方黄土高原の渭水流域と比べて実に多様な自然環境をもつ地であったことに気づかれる。齊の人々が天神を祀った都臨淄城の東南、天齊淵は泉が一面に湧き出した所であったが、そこには現在でも泉の湧水を溜める浅い井戸を備えた畑があり、綿花が植えてあった。始皇帝が三ヶ月滞在して離宮を築いた琅邪台は四時（四季）主を祀った海岸

の丘陵で、北側の海岸にはいまでは塩田が見られた。之（ふ）は中州でつながった山岳からなる島で、その南麓に陽主を祀る地があった。その南の烟台の海湾は良好な漁港となっている。陰主を祀る萊山も、北に渤海を遠望する地にあり、西の龍口の町も港湾となっている。緑の樹木、紺碧の海は、古代の山東の地に豊かな自然資源をもたらした。戦国斉の国の経済を支えたことであろう。日月（太陽と月）の順行、陰陽の交替が季節の循環をもたらした。豊富な自然資源を生み出す。自然の不順は災害をもたらした。兵（戦争）も起こると考えられていた。

しかし、歴史の結果から見れば、戦国の抗争は、西の乾燥した黄土高原に拠を置き、一元的な上帝を信奉した秦によって終息した。のちに秦の立場からこのことを振り返って見れば、秦の統一戦争を歴史の必然として総括し、秦の軍事国家としての優位性などが統一を導いたとして語られる。しかし軍事的には敗北した斉の立場で秦帝国の形成史を捉えて見れば、政治、経済、文化すべてが秦に否定されたわけではない。『管子』の世界はまさに、古代中国全体にも生き続けていった。

著者のつぎなる仕事として、軍事国家秦の側面ではなく、秦地の黄土という土壌、自然を是非、実証的、体系

的に取り組んでいただきたい。東西の比較のなかから、より豊かな中国古代史像が画かれるものと思われる。原（著者）史学に期待するところは大きい。